

上ノ林遺跡

長野県箕輪工業高等学校クラブ練習室建設に
伴う上の林遺跡の第5次緊急発掘調査報告書

1991年

箕輪町教育委員会

上・林遺跡

長野県箕輪工業高等学校クラブ練習室建設に
伴う上の林遺跡の第5次緊急発掘調査報告書

1991年

箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

上の林遺跡は、町内に残る数多くの遺跡の一つであります。遺跡の所在する一帯は、現在県立箕輪工業高等学校の敷地としてそのほとんどを占めています。町教育委員会は、過去4回に亘って行なわれた校舎改築に伴う本遺跡の緊急発掘調査を実施して、記録保存に努めて参りました。

この度、老朽化した旧音楽室を取り壊し、新たにクラブ練習室を建設することになりました、学校関係者並びに県教育委員会文化課と協議を重ねた結果、ここに上の林遺跡の第5次緊急発掘調査を行なう運びとなりました。

調査の結果につきましては、各章を追って後述致しますが、本書が過去の調査結果と併せて遺跡の性格や地域の歴史を振り返る一助となれば幸いに存じます。

報告書の刊行に当たり、深いご理解とご協力をいただきました学校関係者、調査団員の皆様方に、心から感謝とお礼を申し上げます。

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13,238番地他に所在する上の林遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行なったものである。調査は、平成2年4月20日から5月7日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行なった。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行なった。
 - ・遺構図の整理—宮脇陽子
 - ・遺物の実測・トレース—赤松 茂
 - ・土器拓影—井上武雄
 - ・挿図作成—赤松 茂、宮脇陽子
 - ・写真撮影・図版作成—赤松 茂、井上武雄
4. 遺構図は、次の縮尺に統一。
　土壤—1:40
5. 遺物実測図は、次の縮尺に統一。
　縄文土器拓影図—1:3、石器—2:3
6. 本書の執筆は、赤松 茂、宮脇陽子が分担した。
7. 本書の編集は、赤松 茂、井上武雄、柴登巳夫、根橋とし子、樋口彦雄、福沢幸一、宮脇陽子、山内志賀子が行なった。
8. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

本文目次

題　字	團　長　樋　口　彦　雄
序	教育長　堀　口　泉
例　言	
本文目次	
挿図目次	
表　目　次	
図版目次	
第Ⅰ章　遺跡の立地.....	1
第1節　位　置.....	1
第2節　自然環境.....	2
第3節　歴史環境.....	3
第Ⅱ章　発掘調査の経過.....	5
第1節　調査に至る経過.....	5
第2節　調査団の編成.....	5
第3節　調査日誌.....	6
第Ⅲ章　遺跡の状態.....	7
第1節　調査の方法と結果.....	7
第2節　層　序.....	7
第Ⅳ章　遺構と遺物.....	10
第1節　検出遺構と遺物.....	10
第2節　遺構外出土遺物.....	11
第Ⅴ章　ま　と　め.....	12

挿図目次

第1図 位置図.....	1
第2図 周辺遺跡分布図.....	4
第3図 土層模式図.....	7
第4図 調査地設定図.....	8
第5図 グリッド設定及び造構配置図.....	9
第6図 土壤実測図、出土遺物実測図・拓影図.....	10
第7図 造構外出土遺物拓影図.....	11

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表.....	3
------------------	---

図版目次

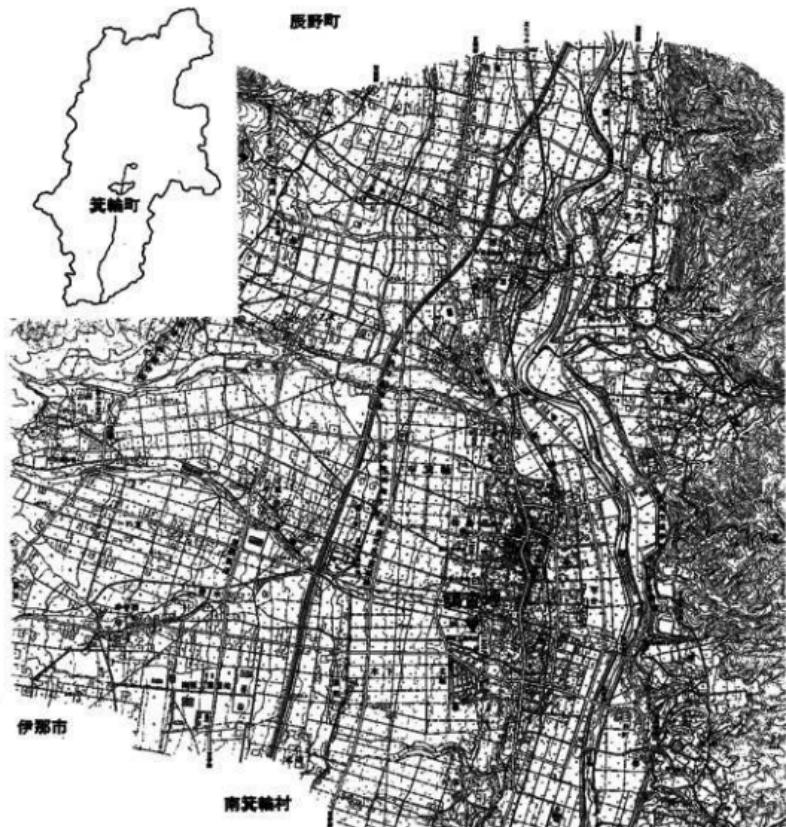
図版1 調査地近景、調査地全景

図版2 土壌、出土遺物

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位 置

上の林遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13,238番地他、北緯35°54'07"、東經137°59'07"の地点で、標高約708mの県立箕輪工業高等学校の敷地内に位置する。遺跡地は、天竜川右岸段丘上にあり、ここは眺望もよく、南に仙丈岳、北には守屋山を望むことができる。また、天竜川対岸の三日町区が展望できる。



第1図 位 置 図

1 : 50,000

第2節 自然環境

箕輪町は、西は木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曾山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帶無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂の層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇央部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。また、段丘崖下には、天竜川による広大な氾濫原を見ることができる。

上の林遺跡は、この河岸段丘の突端部にそって帯状に連なる遺跡群の一つであり、上記の通り恵まれた自然環境の中に存在しているといえよう。



遺跡周辺地形

第3節 歴史環境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地が形成された地形で、湧水にも恵まれ先史より人が居住し易い格好な所といえる。町内にはそんな原始・古代人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地176ヶ所、古墳24基が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。その多くは河岸段丘上及び扇状地に立地しており、天竜川右岸の遺跡の分布状況は、河岸段丘の突端部にみられる遺跡（1～8）と、深沢川や桑沢川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に存在する遺跡の2つに大別することができる。本年までに行なわれた発掘例を中心に前者について概観してみると、縄文・弥生・平安の各時代の集落址の一端を探ることができた。また、段丘崖下には古代水田址である広大な箕輪遺跡が広がる。

今後、これらの遺跡を保護していく上でも、この一帯における開発には、充分な注意を図っていく必要があるといえる。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代						備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	平安	中近	
1	上の林	木下	段丘		○	○		○		昭和55、56、57、60年に発掘調査
2	王墓古墳	松島	段丘				○			
3	本城	松島	段丘			○		○		
4	中山	松島	段丘		○			○		昭和59、61、62年に発掘調査
5	藤山	松島	段丘		○			○		
6	北城	木下	段丘			○		○	○	昭和47年に発掘調査
7	南城	木下	段丘		○			○	○	昭和51年に発掘調査
8	猿楽	木下	段丘			○			○	昭和49年に発掘調査
9	箕輪	三木日町下	平地		○	○	○	○	○	昭和55、56、57、58年に発掘調査



- ① 上の林 ② 王墓古墳 ③ 本城 ④ 中山
 ⑤ 藤山 ⑥ 北城 ⑦ 南城 ⑧ 猿楽 ⑨ 笈輪

第2図 周辺遺跡分布図

第II章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

遺跡の広がる一帯は、現在県立箕輪工業高等学校の敷地としてそのほとんどを占めている。また高校が移転される以前は、畠または公園として土地利用されており、耕作中及び公園造成時において、数多くの遺物が出土し、採集されたと伝えられている。更に、高校が当地に移転した際、校舎などの学校施設の建設時においても遺物の出土がみられ、町郷土博物館にその一部が保管されている。そして、昭和55～57年・60年の4次に渡り校舎の老朽化による改築工事に伴って発掘調査が実施され、多くの遺構・遺物が出土し、縄文時代早期から平安時代まで断続的に集落が営まれてきた複合遺跡であることが判明した。

今回、旧音楽室を取り壊し、新たにクラブ練習室を建設することとなり、県教育委員会文化課の指導のもとに、学校関係者と町教育委員会の間で建設予定地の埋蔵文化財に対する保護協議を重ね、発掘調査を実施し記録保存をすることとなった。過去における発掘では、大きな成果を残しているので、今回の調査にも学校関係者を含め多くの方々の注目を浴びていた。

調査は、このような経過によって、町教育委員会が県教育委員会より委託を受けて、新たに調査団を編成し調査を実施する運びとなった。

第2節 調査団の編成

調査団

顧問 丸山敏一郎 県立赤穂高等学校定時制教頭

団長 樋口 彦雄

担当者 柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員

調査主任 赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員

調査員 福沢 幸一 長野県考古学会員

調査員 根橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員

調査員 宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

調査団員 井上武雄、岡 章、岡 正、春日義人、中坪侃一郎、堀五百治、松田幸雄

事務局

堀口 泉 箕輪町教育委員会教育長
上島富作夫 箕輪町教育委員会社会教育課課長
市川 健二 箕輪町教育委員会社会教育課係長
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員
石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員
赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員
酒井 蜂子 箕輪町郷土博物館臨時職員
根橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員
宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

第3節 調査日誌

4月20日 (金) 晴後曇

機材を運搬し、テントの設営を行なった。その後、表土はぎと上面確認を行なった。

4月24日 (火) 曇

上面確認を行なう。遺構は、焼土を含む土壤が1基検出された。

4月27日 (金) 晴

土壤の半剖をし、土層断面を測量した後全掘を行なった。覆土中から、繩文土器片や黒曜石が出土した。また、標高移動を行ない、ベンチマークを落とした。土壤の平面測量と調査区全体測量をし、全ての調査を終了した。



第III章 遺跡の状態

第1節 調査方法と結果概要

発掘調査は、遺跡包蔵地が広範囲に渡ると予想され、また現段階で地形の把握ができないため、予定される全工事面積を調査対象とした。調査地は、遺跡の南端部に位置しており、旧校舎建設時における地形の変動はないものと思われたが、基礎工事等による地下への影響は少なからずも考えられることであった。

調査はまず旧校舎（音楽室）の解体後、重機の搬入が不可能なため人力による表土の除去作業を行ない、遺構上面確認を行なった。そして確認された遺構内の調査を行ない、測量・写真等で記録をした。グリットは、遺構上面確認が終了した後、4m四方で主軸を南北方向に併せて設定し、南北はアルファベット、東西はローマ数字を用いて表示した。また、調査地の北方にある水準点より標高移動を行ない、調査地の北東角にベンチマーク（708,60m）を落とした。

調査の結果、土壤1基を検出したが、やはり工事の際に地盤の上部が削平されており、旧校舎（音楽室）の基礎は既に調査区全域にみられ、II層にまで及んでいた。そのため遺構確認面は、その構築面とは考えられない。

第2節 層序

天竜川西側の扇状地上（河岸段丘上）における地質構造は、耕作土などの黒褐色腐食土→ローム層→砂岩・粘板岩を主体とする円錐層・砂層という堆積状況が普遍的にみられ、河岸段丘上の突端部に位置する本遺跡もこれを基本としている。

I層－明茶褐色土（表土層）。旧校舎（音楽室）

建設時における置き土であり、II層の

搅拌層と思われ、締りはあまりない。

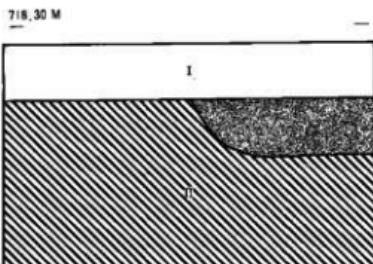
また、土器片をまばらに含んでいる。

II層－黄色土（ローム層）。粘性・締りが共に

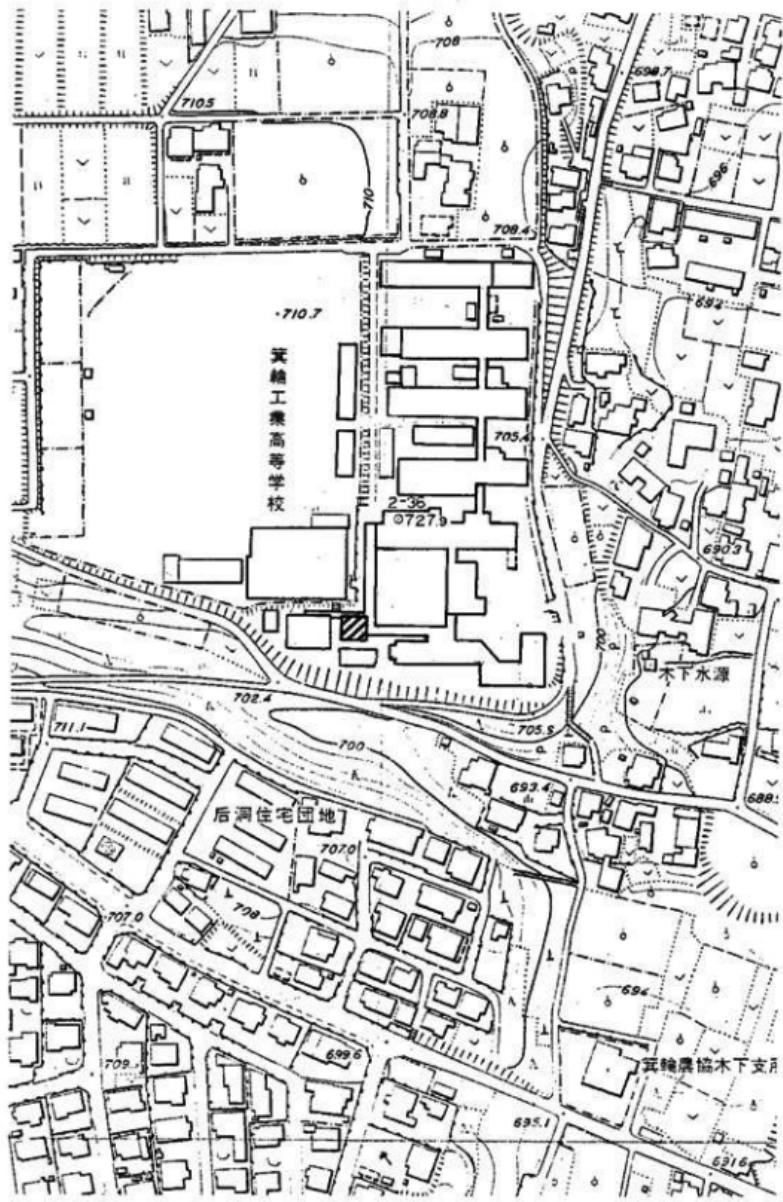
強く、本層確認面が遺構（a層）検出

面であった。旧校舎（音楽室）の基礎

が、本層にまで及んでいた。

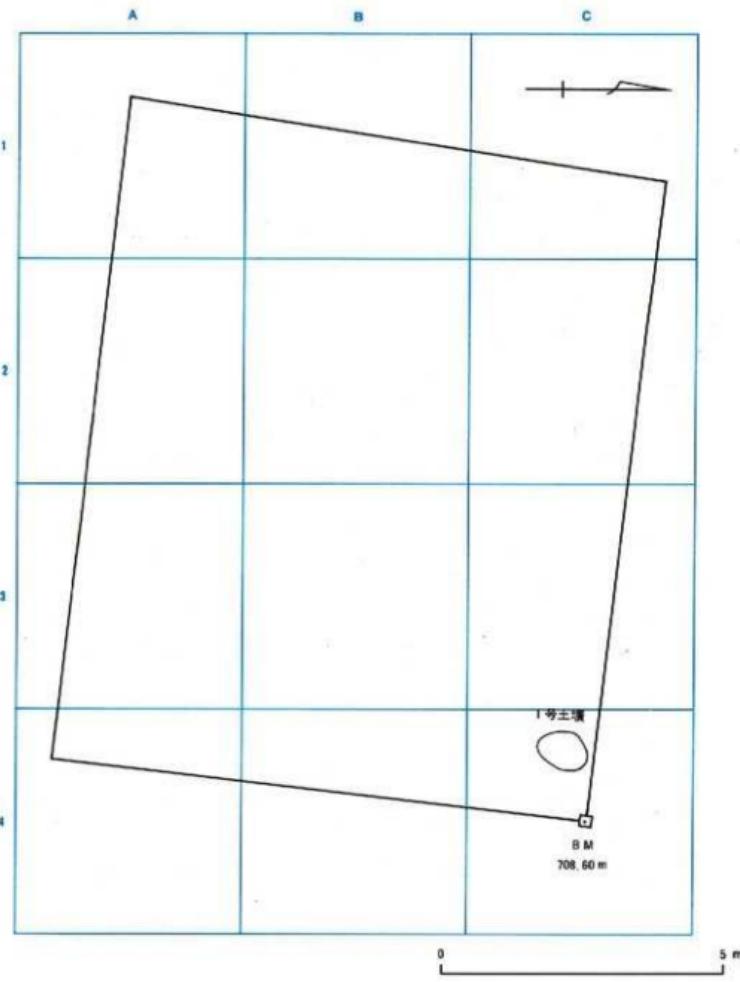


第3図 土層模式図



第4回 調査地設定図

1 : 2,500



第5図 グリッド設定及び造機配置図

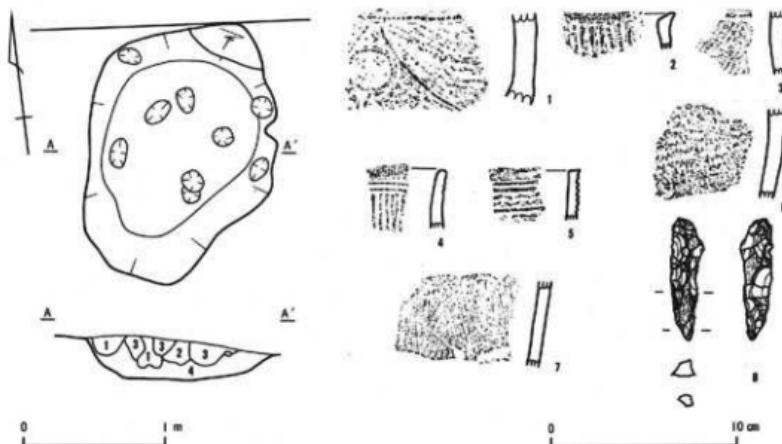
第IV章 遺構と遺物

第1節 検出遺構と遺物

土 壤 (第5図)

C-4グリットに位置する。97×72cmの規模で、梢円形を呈する。深さは16cmを測り、断面は半円形である。また、壁面及び底面に小穴を有する。旧校舎建設の際に、上部の削平が行なわれ、かつて中央は基礎工事により破壊を受けているため、構築時の状況は不明と言える。覆土は4分層されるが、4層を基本に、1～3層がブロック状に混入している。1層は赤褐色土で、焼土が多量に含まれる。締りはあるが粘性はあまりない。2層は茶褐色土で、焼土をまばらに含む。締りはある、粘性はややある。3層は黒褐色土で、締り、粘性ともにややある。4層は明茶褐色土でローム粒子をまばらに含む。締りはややあり、粘性はあまりない。また、全体的に炭化物をまばらに含んでいる。

遺物は、土器片及び石錐・黒曜石の破片で、出土点数は少ない。1は、地文に単節RL縄文を施し、結節状浮線文を貼付けている。2は、1と同様に結節状浮線文の貼付けが行なわれる。3は、沈線区画?の単節RL縄文を施すものである。4及び5は、半截竹管状工具を使用し横位・縦位に沈線文を施すものである。6は、単節RLを充填するものである。7は、半截竹管状工具を用い、縦位・羽状に条線を意識して沈線を施している。8は、黒曜石製による石錐で



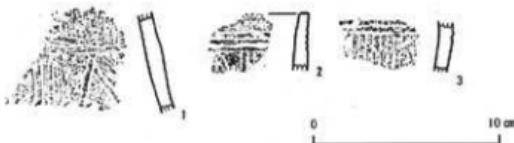
第6図 土壤実測図、出土遺物実測図・拓影図

基部が一部欠損する。

これらの出土遺物から考えて、本土墳は、縄文時代前期後葉に位置づけられよう。

第2節 遺構外出土遺物（第7図）

遺構上面確認作業中に、数点の土器片及び黒曜石の剥片が出土している。土器片は、縄文時代前期後葉・中期初頭が主で、須恵器も1点のみみられた。1～3は、半截竹管状工具を使用し、沈線文による幾何学的な文様構成を行なうもので、縄文時代中期初頭に比定されよう。



第7図 遺構外出土遺物拓影図

第V章 まとめ

今回の調査では出土遺物から、縄文時代前期後葉に位置づけられる土壙1基のみが検出した他、表土中より縄文時代中期初頭に比定される土器片が数点出土したに留まった。旧校舎（音楽室）建設地において、調査地の整地及び基礎工事が行なわれており、既にその時点で地下遺構への影響が及んでしまったと判断される結果であった。

過去4度に渡る発掘調査では、縄文時代早・前・中期、弥生時代中・後期、平安時代の遺構・遺物の出土が確認されている。いずれも今回と同様に、箕輪工業高校校舎改築に伴うものであり、広範囲に渡る遺跡地のごく限られた面積での調査であったため、遺跡全体の性格や各時代にみられる集落構成などは、まだ解明されるに至っていない。しかし、調査を重ねるごとに少しづつその内容が明らかにされてきてはいるが、反面開発に対する本遺跡の保護にはよりいつそう注意を払っていく必要がある。

末筆ではありますが、今回の調査に際して格別なご理解とご協力をいただきました、学校関係者の方々を始め、団員の方々に改めてお礼申し上げたいと思います。

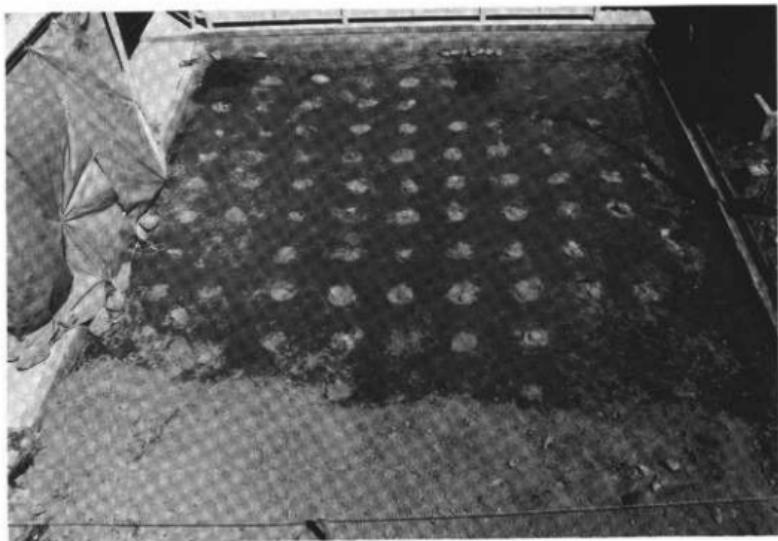
参考文献（著者・編者名50音順）

- | | |
|-------------|---------------------------------|
| 今村啓爾 | 1982 「諸磯式土器」 縄文文化の研究3 雄山閣 |
| 岡谷市教育委員会 | 1980 「梨久保遺跡」 |
| 長野県教育委員会 | 1987 「大洞遺跡」 県中央道長野線埋蔵文化財調査報告書1 |
| 長野県史刊行会 | 1981 長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表 |
| 長野県史刊行会 | 1983 長野県史 考古資料編 全1巻(3) 中・南信版 |
| 長野県史刊行会 | 1988 長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺跡・遺物 |
| 三上徹也 | 1987 「梨久保式土器再考」 長野県埋蔵文化財センター紀要1 |
| 箕輪町教育委員会 | 1981 「上の林遺跡(第1・2次)」 |
| 箕輪町教育委員会 | 1982 「上の林遺跡(第3次)」 |
| 箕輪町教育委員会 | 1986 「上の林遺跡(第4次)」 |
| 箕輪町誌編纂刊行委員会 | 1976 箕輪町誌 第1巻 自然・現代編 |
| 箕輪町誌編纂刊行委員会 | 1986 箕輪町誌 第2巻 歴史編 |

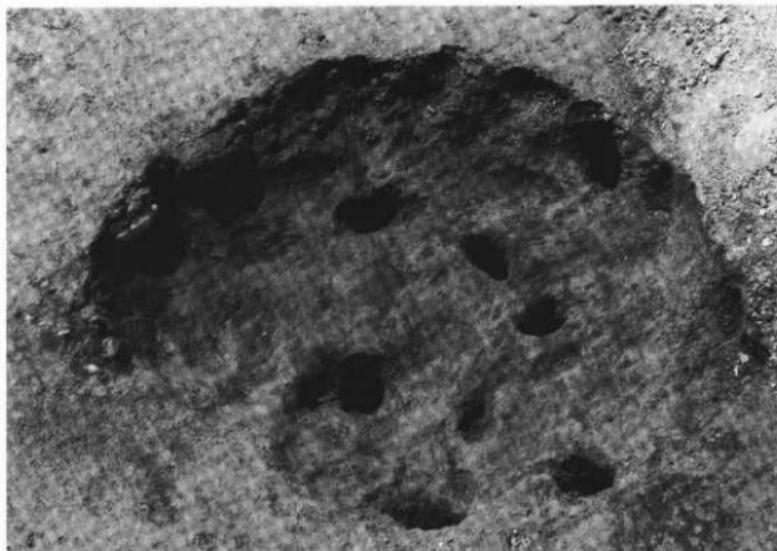
図 版



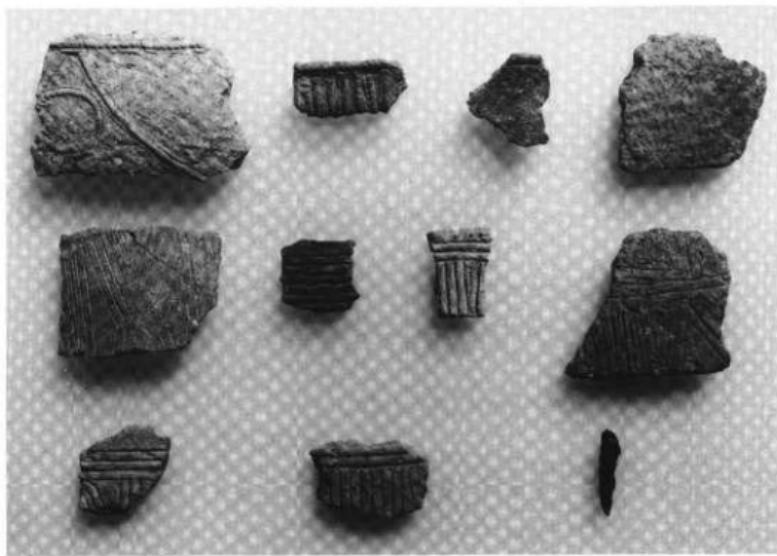
調査地近景（西方より）



調査地全景（西方より）



土 壤



出 土 遺 物

上の林遺跡

長野県箕輪工業高等学校クラブ練習室建設に
伴う上の林遺跡の第5次緊急発掘調査報告書

平成3年3月30日 印刷

平成3年3月30日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 ミウラ企画書籍